富山新聞2023年2月4日付

早産の子ども 下気道感染症 リスク高く

富大附属病院の研究グループ調査

富大附属病院周産母子センターの田村賢太郎講師ら

の研究グループは、早産で生まれた子どもは、1、2歳までに気管支炎や肺炎など下気道感染症にかかるリスクが高いとの解析結果をまとめた。抗体製剤「パリビズマブ（シナジス）」を投与すると、正期産の子どもと同じ程度まで感染リスクが下がる可能性があることも分かった。

グループは、環境や化学物質が子どもの健康に与える影響を調べる環境省の「エコチル調査」に参加する女性と子ども6万7288組を対象に、1歳時と2歳時の各種感染症の罹患（りかん）歴を調べた。

在胎37週未満の早産の子どもは、正期産に比べ、1歳、2歳時点ともに、下気道炎にかかる頻度が高かった。パリビズマブの投与の有無を反映させた解析結果では、正期産と同程度まで罹患頻度は下がった。

パリビズマブは、呼吸器の感染症が重症化するのを予防する効果があり、在胎36週未満の早産児や先天性心疾患のある子どもらが投与の対象となっている。

昨年12月28日、学術雑誌サイエンティフィック・レポーツに掲載された。